

学習者主体の授業づくりを目指した場の設定の工夫 ～する，みる，支える，知る楽しさを味わう ことができる体育科の実践を通して～

枕崎市立別府小学校

教諭 小野池 篤志

目 次

1	主題設定の理由	2
(1)	時代の要請	2
(2)	学習指導要領から	2
(3)	学校教育目標から	2
(4)	子供の実態から	2
2	研究主題	3
3	研究の内容と方法	3
(1)	目指す子供像	3
(2)	研究の内容と方法	3
(3)	主題についての言葉の定義	4
4	研究の実際	5
(1)	活動場所の設定の工夫	5
(2)	対話活動の場の設定の工夫	6
(3)	学習計画・1単位時間の流れの設定	7
(4)	体育黒板・体育掲示板（教室掲示）の設置	8
(5)	他教科との関連	9
5	成果と課題	9
(1)	定量的成果	9
(2)	研究の成果と課題	9
(3)	今後の取組	10
6	おわりに	10

【引用・参考文献】

- | | |
|-------------------------|-----------|
| ○『小学校学習指導要領解説 総則編』平成29年 | 文部科学省 |
| ○『小学校学習指導要領解説 体育編』平成29年 | 文部科学省 |
| ○『学びの羅針盤』令和7年 | 鹿児島県教育委員会 |

1 主題設定の理由

(1) 時代の要請

現代社会は、変動性・不確実性・複雑性・曖昧性の意味をもつ VUCA の時代と言われており、予測困難な時代となっている。その影響で、これまでとおりの手段が通用しにくくなったり、見通しのもてない中での生活となったりしている。また、デジタル化や AI の技術も急速に進み、多くのことが便利で効率的にできるようになっている一方で、現実世界の出来事なのか、虚構なのかの区別も難しくなっている。

そのような時代の中で、これから生き抜く子供たちには、よく観察した上で、状況を判断し、深く考えて意思決定を行い、行動していく力が求められる。この力は、社会や他人から促されてするのではなく、今自分に何が必要なのかを主体的に考えて解決していくことが欠かせないと考える。

(2) 学習指導要領から

平成 29 年告示の総則から、他者と協働して課題を解決していくことや、複雑な情報を見極めることなどから新たな価値を構築していくことが時代を生き抜く上で必要な力であること分かる。また、主体的・対話的で深い学びを実現した授業改善を推進し、これから求められる資質・能力を身に付けさせ、生涯にわたって能動的に学び続ける力を育成することが求められている。

体育科の学習指導要領には、運動やスポーツが好きな子供たちが増えた一方で、運動する子供とそうでない子供の二極化が進み、体力が高かった昭和 60 年代頃と比較すると低い状況であることが指摘されている。また、心と体を一体として豊かなスポーツライフを実現するにあたっては、自己の運動や健康に対して、積極的・主体的に課題解決をしていく資質・能力の育成が求められている。その実現にあたっては、「する」ことや技能面に偏った授業づくりをするのではなく、「する・みる・支える・知る」楽しさを味わうことができる授業で、運動やスポーツにもっと親しみをもちながら生活をする事ができると考える。

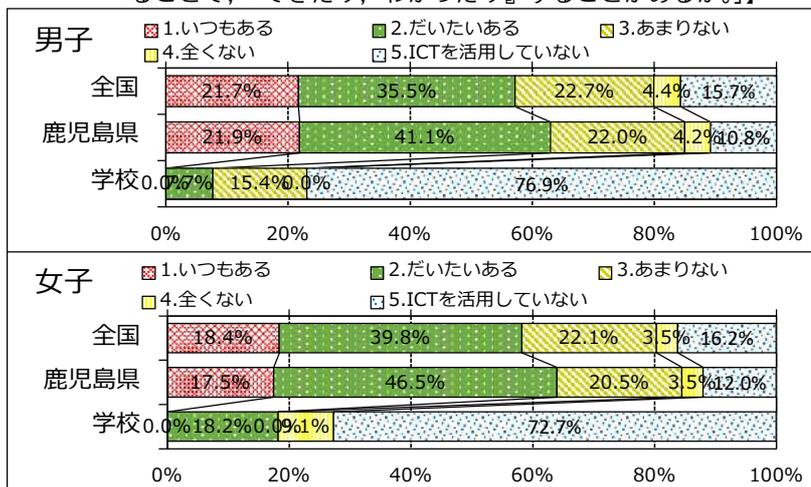
(3) 学校教育目標から

本校の教育目標は、『心豊かで主体的に課題を解決し、新時代をたくましく生きる別府っ子の育成』である。この教育目標からも、時代とともに変化していく課題に対しても主体的に考え、解決しながら生きていくことができる子供の育成が求められている。このことから、子供の主体性が重要視されていることが分かる。

(4) 子供の実態から

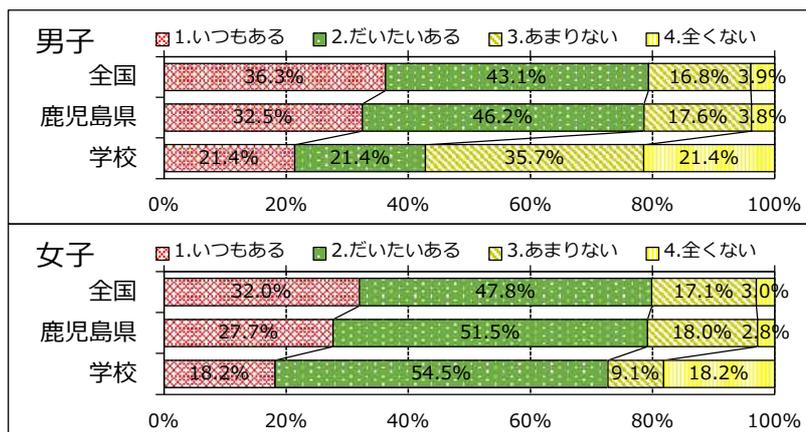
令和 6 年度に行った、体力テストの質問調査では、全ての子供が「運動が好き」と回答しており、体育科の授業も子供が進んで取り組み、運動やスポーツに対して親しみをもっていることが分かった。しかし、運動やスポーツを大切だと

【資料 1：体力テスト調査結果「体育の授業で ICT 機器を使って学習することで、『できたり、わかったり』することがあるか。】

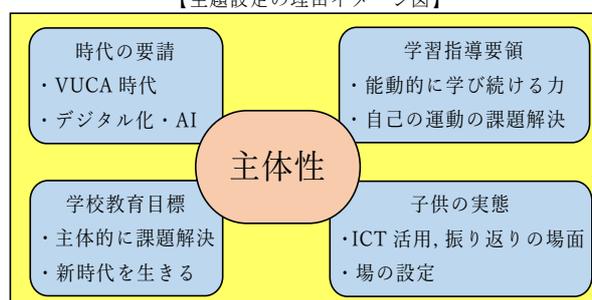


感じているかという項目では、男子が、全国や鹿児島県と比較するとやや低くなっており、日常生活と運動の関わりについての意識が低く、平日の運動時間は平均的であるが、土日の運動時間が、全国や鹿児島県と比べると大幅に低くなっていた。また、資料1と資料2からは、体育科の学習でICTを活用した場面が少なく、振り返りの場面で、「できた・わかった」ということも大幅に低くなっていることが分かった。このことから、ICTを使った場面を設定したり、振り返りの時間を設定したりと場の設定を工夫することで、子供たちがもっと日常生活の中で運動やスポーツに親しみ、主体的に課題を解決していくことができると考える。

【資料2：体力テスト調査結果「体育の授業の最後に学習したことを振り返ることで、『できたり、わかったり』したことがあるか。】



【主題設定の理由イメージ図】



2 研究主題

**学習者主体の授業づくりを目指した場の設定の工夫
～する、みる、支える、知る楽しさを味わうことが
できる体育科の実践を通して～**

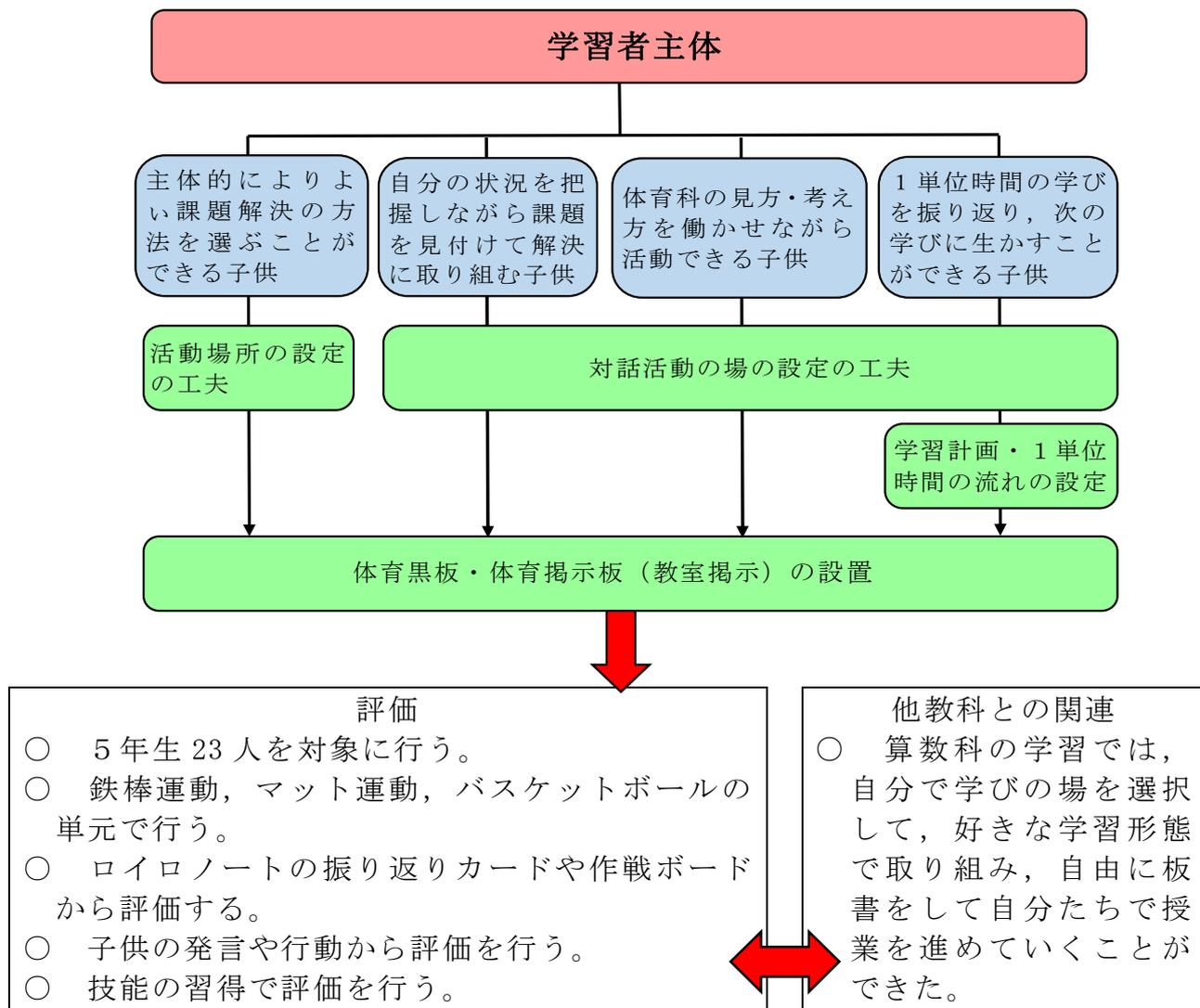
3 研究の内容と方法

(1) 目指す子供像

- 主体的によりよい課題解決の方法を選ぶことができる子供
- 自分の状況を把握しながら課題を見つけて解決に取り組む子供
- 体育科の見方・考え方を働かせながら活動できる子供
- 1単位時間の学びを振り返り、次の学びに生かすことができる子供

(2) 研究の内容と方法

- ア 活動場所の設定の工夫
- イ 対話活動の場の設定の工夫
- ウ 学習計画・1単位時間の流れの設定
- エ 体育黒板・体育掲示板（教室掲示）の設置



(3) 主題についての言葉の定義

ア 学習者主体とは

鹿児島県教育委員会が示している学びの羅針盤から，一律・一斉・一方向のみによる授業から脱却することにより，子供が主体となり，自分の理解度や認知の特性に応じて学ぶ場・時間・方法・学習形態を自己調整しながら学んでいくことであると示されている。そのような学びが実現することにより，個別最適な学びと協働的な学びが一体となり，学習者が満足する学びができるのではないかと考える。

イ 場の設定とは

子供たちが学んでいく上で，それぞれに困難さがあり，分岐点がある。そのような際に，どの方法で解決していけばよいかを，教師が分かりやすく示し，自分の課題にあった場を選択することができるように環境づくりを行うことを「場の設定」とした。場の設定は，個人の課題に合わせて教師側が意図的に設定していくことが多いが，子供たち自ら場づくりや場の調整を行ったりしながら課題解決をしていく力も重要であるため，自由に環境づくりをさせる活動も取り入れていく必要がある。

ウ する，みる，支える，知るとは

体育科の学習指導要領にも記載されている見方・考え方である。「する」

とは、主に技術の習得や試合をするなど、主に自分が中心となり関わることである。「みる」とは、友達の技や模範を見ることや、自分の技を見ることで分析・理解・気付きがあることである。「支える」とは、チームメイトと励まし合い気持ちを支えることや補助をすることで技能の習得につなげるなど、心理的・物理的に支えることである。「知る」とは、技の行い方を知ることや自分の状況を知ること、コツを知ること、運動の価値を知ることなどであり、知識に関することである。

エ 楽しさを味わうとは

運動をすることや勝利することを喜ぶ楽しさだけでなく、観戦することや応援することも含めて楽しく活動し、できたときの喜びを共有したり、分かったコツを伝えたりすることで、達成感を感じる活動こそが楽しさを味わうことである。運動によって楽しさを味わうことにより、内発的動機付けと繋がり、より一層自分から進んで意欲的に運動やスポーツに関わることができると考えた。

4 研究の実際

(1) 活動場所の設定の工夫

自分ができるようになりたい技や課題、チームの課題に応じて練習場所を選択して、活動することができるように、できるだけ多くの場を設定した。

ア 鉄棒運動



けり上げる感覚をつかむことができるようにする場



回転や支持の恐怖を少なくする場



体を鉄棒に引き付ける感覚をつかむ場

イ マット運動



開脚をして起き上がる感覚をつかむ場

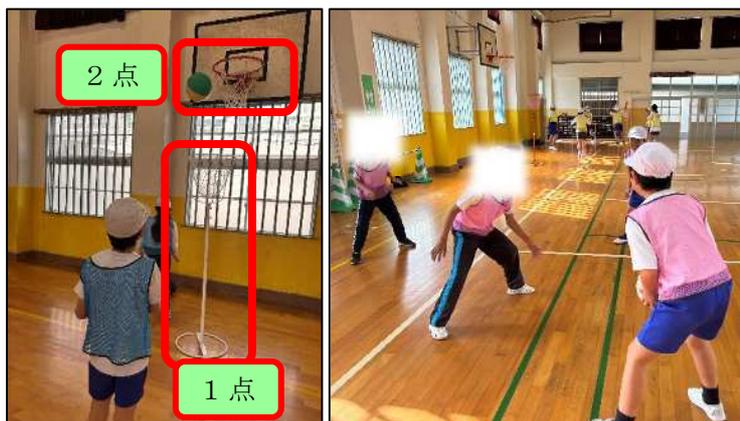


勢いをつけて回転する感覚をつかむ場



タイムシフトカメラで自分の技を確認する場

ウ バスケットボール



チームの課題にあった練習の場所の設定や、シュートが苦手な子供でも得点がしやすいように、高さの低い1点ゴールと標準の高さの2点ゴールに分けることで個人の課題に応じた練習やプレーができるように工夫をした。また、フリースペースを設けることで、スペースをつくる練習や、パス回しの練習もできるようにチームで考えて自由な練習ができるようにした。

(2) 対話活動の場の設定の工夫

ア ICTの活用

自分やチームの状況を把握し、課題を見付けやすくするために、どの単元でも、ICTの活用を行った。写真1、2では、自分たちの活動の様子を撮影し、自分の動きのよさや課題を確認し、子供たち同士で話し合い、どのようにすればさらによくなりそうか対話をしている場面である。写真3では、写真5にあるような作戦ボードを使って、チームの課題やめあてに沿った作戦を話し合っている。また、撮影した動画を共有したり、提出させたりすることにより、見方・考え方を働かせながら活動ができるようにした。そして、自分の学びや成果を記録し、いつでも確認することができ、次の学びにつなげることができるようにした。



写真1(鉄棒運動)



写真2(マット運動)



写真3(バスケットボール)

イ ペアやグループでの活動

個人やチームの状況や課題を把握させるために、鉄棒運動とマット運動では、ペアやグループは固定をせずに、同じ技にチャレンジしている子供同士や同じ課題を抱えている子供同士が自由に集まって対話をさせた。バスケットボールでは、準備運動からチームで活動し、チームの課題や成果を話し合わせることで、チームに合った次の練習内容や目標を決めていくことができるようにした。話す時間は特に設定せず、自由に対話をして、いつでもそれぞれで学び合えるようにした。

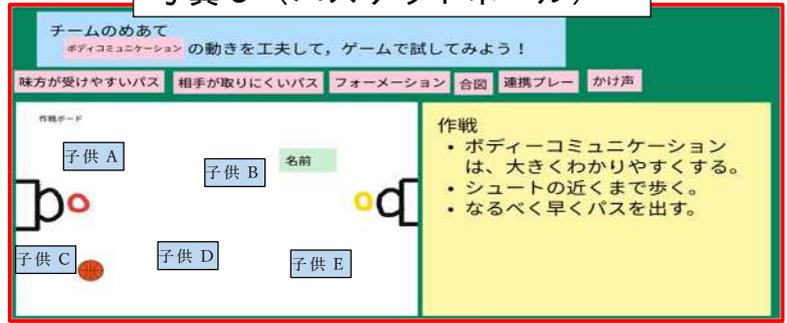
ウ キーワードの活用

話し合う際には、キーワードがあると視点をもって話すことができ、対話活動が活性化すると考え、どの単元でも第1時の試しの運動でキーワードを見付けたり、共有したりする活動を設定した。写真4は、子供たちからあがったキーワードを、シンキングツールにまとめさせたもの、写真5は、めあてに使いやすいようにカード(ピンク色)として配付したものである。

写真4 (マット運動)



写真5 (バスケットボール)



(3) 学習計画・1単位時間の流れの設定

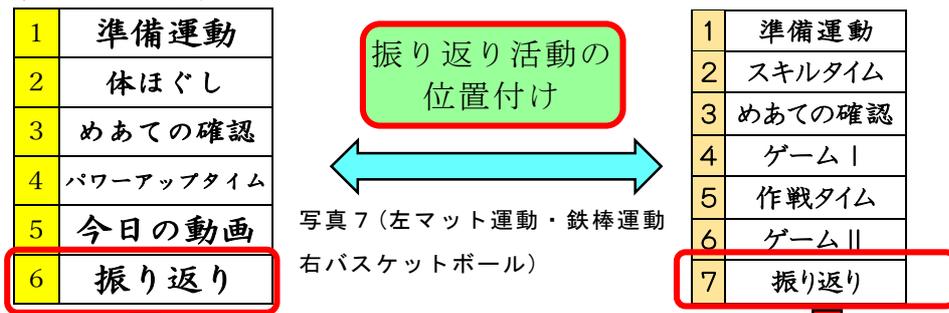
どの单元でも、自分たちで見通しをもちながら主体的に活動することができるように、学習計画と1単位時間の流れを設定した。学習計画の中には、写真6のように、活動内容や最終的なゴールを明確化することにより、毎時間自己調整をしながら取り組めるように工夫した。また、写真7のように、1単位時間の流れでは、必ず振り返りの場を設定して次の学びにつなげることができるようにした。それらを掲示して示した上で、学習は全て自分たちで進めさせた。

ア 学習計画と最終的なゴール

- 鉄棒運動 → 3つの技を組み合わせる連続技をしよう。
- マット運動 → 挑戦したい技を安定してできるようになろう。
- バスケットボール → ボールをつないで楽しんで、大会をしよう。

時間	1	2	3	4	5	6	7	
学習計画	オリエンテーション	前転					後転	5年生バスケット大会
			開脚後転・伸膝後転	開脚前転・伸膝前転	★すご技★ 倒立前転・倒立後転 跳び前転		チャレンジタイム(ゲーム)	
写真6	学習計画表 (左マット運動, 右バスケットボール)							

イ 1単位時間の学習の流れ



振り返り 前方しんしつ支持回転は難しかった。けど連続前回りはできた。次はどうすればできるようになるかコツを見つけない	振り返り 連続前回りはもう少し腕を曲げてやれば簡単にできそう。	振り返り(できたこと・できなかったこと) フリーなどに行けなかった。ボディコミュニケーションをもっと大きく分かりやすくあらわせた。	次の活動に向けて フリーのところに行くなるべく早くパスを出して、シュートする。
振り返り 前そんなにできなかった前転ができるようになった	振り返り 一回だけ後転ができた次の体育でもまた後転ができるようになりたい	振り返り(できたこと・できなかったこと) パス回しは上手にできた。シュートが上手いかなかった。掛け声は微妙だった。ボールを戻すことが少なかったから次の活動ではボールをシュート側に運ぶようにする。	次の活動に向けて シュート練習をスキルタイムで頑張る。烏がごに動きをつけてフリーを作る練習もする。掛け声も心がける。

(4) 体育黒板・体育掲示板（教室掲示）の設置

どの単元でも、子供たちがいつでも、どこでも対話活動をしたり、思考を深めたりすることができるように、写真8、9、10のように、体育黒板を設置した。板書をする際には、子供の思考や発言も書くことで意識付けをした。また、写真11、12は、教室でも活動内容を振り返ることや次の活動へ主体的・意欲的に取り組むことができるように教室に体育掲示板を設置した。バスケットボールに関しては、教室掲示ではなく、体育黒板の裏に子供の様子や思考を掲示した。

体育黒板	技の種類や運動のコツ、約束、ルール、学習の流れを掲示する場
体育掲示板	子供の活動の様子を主に掲示し、子供が行った活動や行動の価値付けをしたり、称賛をしたりする場

ア 体育黒板

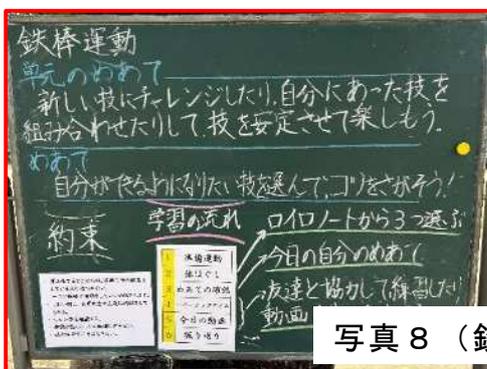


写真8（鉄棒運動）



写真9（マット運動）

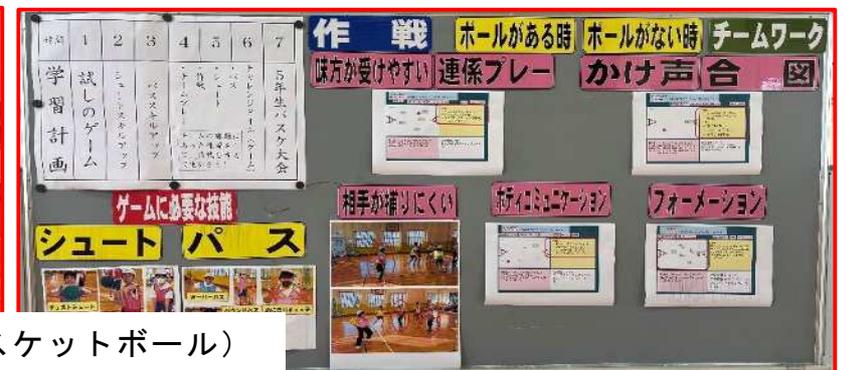


写真10（バスケットボール）

イ 体育掲示板（教室掲示）



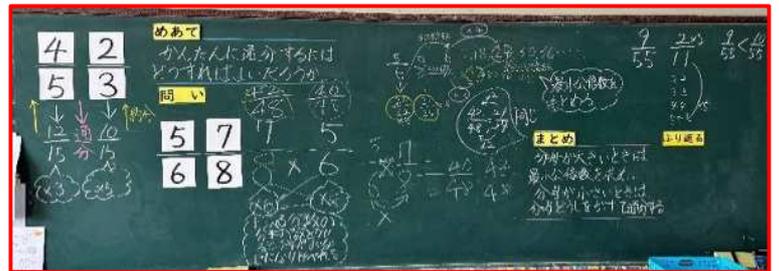
写真11（鉄棒運動）



写真12（マット運動）

(5) 他教科との関連

学習者が主体となり、自己調整や自己選択をしながら学習を進めていくことは、体育科だけではなく、他教科でも重要なことである。体育科を中心に自己調整力や自己実現のための自己選択を行ってきたが、算数科や社会科においても、学習課題や資料を基に自由に子供たちが対話をし、学びを広げたり、深めたりすることができるように授業づくりを行ってきた。特に、算数科では、主体的に活動する中で、自己理解をして見方・考え方を働かせながら、連続した学びを実現するために、めあての確認までを全体で行った後、自由に学習形態や解決方法を選択し、子供たち自身に板書させ学習を進めた。



学びの場・方法の選択

子供による板書

全体指導で板書内容の
意味付け
価値付け



5 成果と課題

(1) 定量的成果

最初に行った、鉄棒運動の振り返りカードでは、できたことやできなかったことだけを書いている割合が多く、自分自身を振り返り、次への活動や目標につなげることができている子供は、8.6%ほどしかいなかった。しかし、振り返りの活動を継続していく中で、マット運動が終わるころには、39%ほどの子供が次にやりたいことや目標について明記することができるようになった。また、1学期当初に行ったティールボールでは、チームの課題を見付けることができたチームは4チーム中、1チームだけであった。2学期末頃に行ったバスケットボールでは、キーワードを明確にしたり、全てチームでの活動にしたりすることによって4チーム全てのチームが自分たちの課題を発見して、次への取組につなげることができた。また、写真7にあるような具体的に自己評価ができるようになった。

そして、資料3や資料4から、子供たちが体育の授業の中で、できたり、わかったりすることがあると感じている数値が男子も女子も90%以上高くなった。これは、ICTを活用した学習活動や対話活動の場面を設定し、振り返り活動を位置付けたことによる成果であると捉える。

【資料 3】

体育の授業で ICT 機器を使って学習することで、『できたり、わかったり』することがあるか。	いつもある	たまにある	ほとんどない	全くない	ICT を活用していない
男子（令和 6 年 5 月実施）	0%	0%	0.7%	15.4%	76.9%
男子（令和 7 年 12 月実施）	50%	50%	0%	0%	0%
女子（令和 6 年 5 月実施）	0%	0%	18.2%	9.1%	72.7%
女子（令和 7 年 12 月実施）	46%	45%	9%	0%	0%

【資料 4】

体育の授業の最後に学習したことを振り返ることで、『できたり、わかったり』したことがあるか。	いつもある	たまにある	ほとんどない	全くない
男子（令和 6 年 5 月実施）	21.4%	21.4%	35.7%	21.4%
男子（令和 7 年 12 月実施）	50%	50%	0%	0%
女子（令和 6 年 5 月実施）	18.2%	54.5%	9.1%	18.2%
女子（令和 7 年 12 月実施）	55%	45%	0%	0%

(2) 研究の成果と課題

- 自分の課題に応じて、場を選択して取り組むことができた。また、子供自身で場の調整を行う姿も見られるようになり、必要に応じて場をつくったり、取り除いたりすることができるようになった。
- 何を話せばよいかをキーワードで明確にすることによって、対話活動を活性化させることができた。また、ICT を効果的に活用することにより、メタ認知がしやすくなり、見方・考え方を働かせながら取り組むことができた。
- 本時の活動や次時への活動を可視化させることにより、子供たちが学びを調整しながら活動することができた。また、振り返り活動を位置付けたことにより、より一層主体的に考え、次の学習へ生かすことができるようになった。
- 自分たちで進んで、黒板や掲示板を見に行き、そこからコツを知ったり、自分の次の活動の方向性を定めたりすることができるようになった。
- 自分の課題を振り返る際に、できた・できなかつただけで評価をしている子供がまだ多い。
- チームでは、主体的に取り組むことができるが、鉄棒運動やマット運動など個人種目になると主体的に対話する場面が減ってしまう。

(3) 今後の取組

何ができて、何ができなかったのかを具体的に言語化させるために、振り返りの場でも対話活動を設定することが重要であると考えた。また、個人種目でも、意図的にペアやグループを決めることで、チームとしての意識を高めて活動や対話を活発にさせることができるようにしたい。その際は、チームとする目的が揺らがないよう、子供たちへしっかりと意識付けさせたい。

6 おわりに

今年度、体育科を研究し、体育科は非認知能力も高めることができる全人教育ともいえるのではないかと考えた。体育科で育てた非認知能力が、学級経営や他教科での活動の充実まで広がることで、今回の研究成果を評価しやすいと感じた。子供たちも同様に、体育科で培った力を自己評価において捉えやすいということも分かった。これらのことから、来年度も、する・みる・支える・知る喜びを味わうことができ、主体的に活動することができるような授業づくりに努めたい。